

Junichi Kikuchi, Yoshiyuki Nakazono, "The Formation of Inflation Expectations: Micro-data Evidence from Japan", *Journal of Money, Credit and Banking*, forthcoming.

#### 日本語要約

現在、「期待」に関する研究は政策当局者からの要請が高まっている。その背景には、期待に働きかける非伝統的金融政策に高い関心が寄せられている現実がある。しかし、期待は直接的に観察できないため、その研究は未だ発展途上にある。

本研究では、家計のインフレ期待に焦点を当てている。日本の五万人の家計を対象に約四年間にわたってインターネット調査を行った。この豊富な個票データを用いて、家計のインフレ期待の形成過程の特徴を明らかにしている。

本研究の発見は三つである。一つ目に、家計のインフレ期待のばらつきは長期よりも短期の方が大きいということが明らかになった。専門家のインフレ期待が長期にかけてばらつきが大きくなるのに対して、家計のインフレ期待では真逆の結果が出ている。二つ目に、半分以上の家計が物価に関する情報を収集できていないということが明らかになった。家計が合理的にインフレ期待を形成するには利用可能な物価に関する情報すべてを活用しなければならない。しかし、約半数の家計が物価に関する情報を収集していない。この結果は、「粘着情報仮説」を支持する結果となっている。三つ目に、日本の家計は食品価格の変化に反応してインフレ期待を修正しているということが明らかになった。アメリカのデータを用いた先行研究において、家計は石油価格の変化に反応して、インフレ期待を修正しているということが明らかになっている。しかし、日本の家計は日頃よく消費する食品価格の変動に影響を受けて、将来の物価変動の予想を形成することが示唆されている。

(作成) 菊池淳一